梁の元帝

——支那古今人物略傳（三）——

宮川尚志

序

六朝文明のかゞやかしい一面である文藝の分野において、曹魏の父子三人（曹操・曹丕・曹植）と蕭梁帝室の父子、卽ち武帝衍、昭明太子統、簡文帝綱、及び元帝繹、のそれ〴〵の星宿は、それ自らの光輝とともにそれが占める地位から云つて、特に注意を惹く。この兩家はともに干戈の際に興起し、支那全土ではないが政治的或ひは文化的に主要な地域を治下に致し、文物制度の更張を計り、ことに學藝を愛好し、またこれを奬勵した。かくて前者は六朝文明の先驅をなし、後者はその極盛を來さしめた。

一　生ひ立ち

梁の世祖孝元皇帝は字を世誠、小字を七符と云ひ、武帝の第七子である。母は宣修容といひ家柄高からぬ石氏の門に生長し、十八歳にして南齊の後宮に入り、始安王遙光に聘せられたが、天監元年に梁の武帝の采女に選ばれ、七年凉秋八月丁巳の日に元帝を生み、姓を阮と賜つた。南史には帝の生誕に因む、彼の二親の信仰と愛情の逸話が語られてゐる。多くの南朝宮廷の女性がさうであつた樣に阮修容の佛教信仰には專一なものがあつたらしい。初め淨名經を習ひ、末に阿毗曇心論を學び、また孝經論語毛詩にも通じてゐたと、元帝自らその母について物語つてゐる。（金樓子后妃篇、以下篇名のみを記す）

帝の幼年は教養高き父母の許において學藝への傾注と宗教的雰圍氣への沈潛との中に流れて行つたものと見える。五歳の時、父帝の前で曲禮を誦し、六歳にして作詩を解した。齔年（八歳）にして誦呪を法朗道人

に受け、觀世音呪・藥上王呪・孔雀王呪を誦しうる樣になつたといふ。（自序）

侍臣や宮人を相手に、天才英發と梁書に評せられる皇子が習ひ覺えた陀羅尼を試みてゐる情景を想像するのはほゝえましい。たゞ傷ましく感ぜられるのは、皇子は誕生の時に眼疾に罷り、遂に一目を眇してゐることである。父母親ら手を下しての療治も効を奏せず、皇子に對するいとほしさの念は一入增した。好學の皇子はこの不幸に怯まず、早くより讀書詩賦に親しみ、遂に六朝諸帝王の中でも有數と考へられる才藻を誇るに至つた。

しかし南朝文明史上の暗影である貴族社會における迷信の流行はこの皇子をも誘ひこまずには措かなかつた。呪術的な慰戲に對していちはやい興味を示した皇子は直ちに中尉何登により外典の呪、例へば癰疽禹步の法を學んでこれに沒頭した。父帝から「宗室の建安侯正立らは卿と同じ年頃だのにもう學問にはげんである。卿は義を學ばうとしないのか」とたしなめられたがまだ止めなかつた。十二三歲になつて侍讀臧嚴から修學を勸められたとき、答へて曰く

只呪を誦するは自ら是佳き伎倆、請ふこの一隅を守らん（自序）

しかし年漸く長じた皇子は他人の勸めによつてではなく、自身の興味がもすこし複雜なものに變つたと見え、易卜・射覆に親み、荊州に行つた時の或る日、三更に甘雨あるべしと占ひ中て、金・玉・琥珀等の指環や人名を書いて紙に封じこんだのを射て、爻辭によりその種類や名前を判じて十中八九であつたことを得意な樣子で記してゐる。（自序）

詩文と占卜にあけくれた皇子の日常はいつまでもは續くべきでない。賢德ある生母修容はやがて宗室の藩翰として州郡を鎭むべき愛兒に勅旨して曰く、

それ政なるものは生民の本なり。爾それ勗めよ

母の一言に翻然と自らを新たにした皇子は、每に政事に心を留め、燭を擧げて事を理め、夜分にして寢ねたといふ。彼の政治に關する思想は今殘る彼の主著金樓子の中に伺はれるが、これについては後に觸れるであらう。

皇子の好學にとつて不幸な事態は彼の身體的缺陷であつた。彼ののこる雙眼の視力は十四歲頃から次第に

衰へ、後には

比來轉た暗く、復能く自ら讀書せず。三十六年來恒に左右をしてこれを唱へしむ（自序）

といふ狀態であつた。同じ頃から彼は心氣の疾に感じ一旦回復したが、後年彼が帝位に卽き繁多な政務に携り殊にその子忠烈世子方等（三十國春秋の著者）が戰死したのを始め五人の男子をあひつぎ失ふに及び再發し

悲を銜みて怳忽として心地荼苦。居れば則ち常に尸存の如く、行けば則ち適く所を知らず（自序）

と自ら症候を判斷し、莊子が「疾なくして呼ぶ。その笑驚けるが如し。これ心氣なり」と云ひ、曼倩が「陰陽爭へば則ち心氣動く。心氣動けば則ち精神散ず」と記したのは自分の場合の如きを指したるにやと推察し、曹志・殷師（仲堪の父）を始め、張思光が居喪の後に、涼國太史令趙敭が乾度曆を三十年の苦心の後に制作した時に罹病した前例とひきくらべ、つひに

晉の阮裕（字は思曠）が士の狂者といへるは豈それ余なるか（自序）

と嘆息してゐる。

かゝる心身の不健全が彼の性格や思想に暗い影響を及ぼした反面に、六朝王侯が溺れ易かつた若干の惡德から彼を護つた場合もある。梁書に贊して

性、聲色を好まず、頗る高名を慕ふ

といふが如く、自らも

予游宴の淹留を喜（コノ）まず。宴する毎に輒ち早く罷（マカ）り、復酒を沾（ソ）へず（立言上）

余、飲酒せず。しかも他人の飲むを憎まず。毎に醉者に遇へば、輒ち欣々然たるのみ（自序）

などゝ述懷し、

……侍姬應に二三百人あるべし。竝に將士に賜ふ

といふ。そして自序篇の首に

人間の世、飄忽として幾何ぞや。石を鑽りて火を見、隙を窺つて電を觀るごとし。螢は朝を覩て滅び、露は日を見て消ゆ。あに自ら序せざるべけんや

とある。こゝにおいて彼の傳記から十分察せられる所の貴族的性格の幾多の短所によつて彼を低く評價しようとすることをしばし差控へて、將來の生の有限を悟り、泯びぬ知識を追求せんとする元帝の姿を再認しなければならぬ。飄風の如き人生を嘆じた帝は、また夏日肘膝を爛らして書を讀み、聚書四十年、八萬卷を得

た所の人であつた。かくて彼の在藩時代が來る。

二　在藩時代

他の皇子たちの如く、元帝は七歳にして湘東郡王邑二千戸に封ぜられ、ついで寧遠將軍、會稽太守、侍中宣威將軍、丹楊尹を歴任し、十七歳の時、府諮議となり三禮を講じたことがある。丹楊尹となつた頃、彼は前任官吏の事蹟を綴采し傳記を作つたが、漸く漫然たる讀書や勉學にのみ耽ることができなくなり、政事の得失を鑑るべき範例をこれらの中から得ようといふ氣持に驅られたのであらう。普通七年梁武の治世漸く事しげき頃、十九歳の彼は出でゝ、使持節都督荊湘郢益寧南梁六州諸軍事西中郎將荊州刺史となり、北方政權の攻勢を防ぐべき要地江陵に赴任した。この年は丙午に當り、（今本志怪篇丙申歳とあるも蓋し誤り）彼は徐孝嗣の孫女にして廣州刺史徐昌の姪を娶つた。彼を驚かせたことには婚儀の日、風景韶和であつたのが日暮から天候激變し大風飛雪あり、後七日、俄かに洪水あり昏曉を分たず、また妻が西州に里歸りの日に從叔急逝し、その喪還るの日大雨車軸を流し、天雷聽事に落ちた。志怪篇に彼はこの次第を詳しく書き「此又尤も怪となす」と結び、その他地理・博物・古傳等に關する新奇珍怪な事例を搜集し、帝の博覽と好學とを雄辯に證してゐる。この篇首に

夫れ耳目の外、怪しむ者あるなしと。余おもへらく然らず。水至寒にして溫泉の熱あり。火至熱にして蕭丘の寒あり。重き者は應に沈むべくして浮石の山あり、輕き者は當に浮ぶべくして沈羽の水あり……

と序し、誤れる知識や推論も多いが、平凡な周圍の事物にあきたらず、驚異の眼を四方に擴げて、新しく美しい世界を發見しようとする態度がよく表れてゐる。海中の布褐、沙嶼の巨龜、外國方士の龍を使ふ呪法、四方の弟子が各自の鄉國の樹を持ち寄つたといふ魯城北の孔子冢、象を食ふ巴蛇の話、女國、葡萄花葉酒のこと、胡國にある白鹽山に產する玉華鹽――それは水精の如く日に映じ琥珀の光に似、專ら君王に供する等と見える。また北魏領の淸鹽池について製鹽法を記し人が池旁の地を耕し池水を取つてこれを沃種し、去つて回視するなくば、正四方、廣さ半寸の鹽を生ずると述べてゐる。事實と想像との共棲、體系づけられない素朴に滿ちたこの篇は措辭の美麗を以て讀むに快い。

中大通から大同の年にかけて、彼は平西・安西・鎭西の將軍の職を歷任し、大同五年には安右將軍護軍將軍領石頭戍軍事に任じた。その間、武帝の樂遊苑に幸するに從ひ、諸子の中に於て特に慈愛せられ賜賚相接し、その日に詩を賦し、その晩に賞を蒙り、左右拭目し朋友改め觀た。時しも季秋の含露之閣に召され、照りゆく月影を浴びて宴に與つた思ひ出を懷かしく彼は描寫してゐる。（雜記上）宮體派の一巨星たる元帝の詩は玉臺新詠に合せて十八首錄せられてゐる。

梁書に贊して

既に長じて學を好み、群書を博綜す。筆を下せば章と成り、言を出せば論と爲る。才辯敏速、一時に冠絕す。……裴子野・劉顯・蕭子雲・張纘及び當時の才秀と布衣の交をなし、著述辭章多く世に行はる

とあるが、彼のかうした幸福な得意な時代は父帝の統治がともかくも國內の治安と北方に對する防備を全うしてゐた時期が去つて了ふ迄は續いた。

在藩時代に彼は自ら金樓子と號した。大同六年、彼が使持節都督江州諸軍事鎭南將軍江州刺史となつた頃宗室の雄鎭として彼の才華は建康貴族の耳目を聳動してゐた。「議論當に湘東王の如くなるべし」と京師で定評された彼は任地においてその畢生の著たる金樓子を作りつゝあつた。彼の生母阮修容はこれ迄もその子に隨ひ荊江に住み、荊州に禪林寺・祇洹寺を建立せる外諸寺の修築資供を吝まず、衆僧の大檀越であつたが、この年六月、六十七歲にして薨じた。阮氏は夙に家事を處理する責任があり、父母に孝事し弟妹を拊循し、また元帝の子である方諸・方等・方規（敬帝）らの教育にも當つてゐた賢婦人であつた。后妃篇で彼は三代の母后を叙した末に生母阮氏について感動に滿ちた思ひ出を詳しく述べてゐる。

昔淮溪を泝り舟艫に侍奉す。今宮寺に還り仰いで帷幙を瞻る。顧復の恩終天報ゆるなく、陟岵の心鯁慕何ぞ已まむ。樹葉將に夏ならんとして彌々風樹の哀に切なり。戒露已に濡れて倍々霜露の戚に縈る。過隙留め難し。川流舍かず。往いて還らざるものは年なり。逝いて見ざる者は親なり

十一月江寧縣に歸葬した。彼の金樓子述作はこんな事情でまだ完成してゐなかつたが、ある人が彼を訪ねてきて

貴方は荊州で眞金を鍛へて樓子をお作りになつたと聞いたが是非かしてみて戴きたい。珍らしいなぐさみとして樂しみたい

と言つた。「これは近頃哈ふべき事であつた」と元帝はその金樓子の中で語つてゐる。（雜記上）

元帝時に三十三歳。老いたる父武帝なほ位に在り、政務の責任ある地位には未だ置かれなかつたことは彼にとつてその時には幸福であり、その後には不幸な事情であつた。めゝしいとも思はれる程の悲哀の中に母を弔つてから十年にして、彼はその最も不得手とする干戈を執つて、父帝を悼ましい死に至らしめた所の寇亂に當らなければならなかつた。

江南を保つた漢族王朝に同樣の例がある樣に梁室を危殆に陷れるに至つた原因には無責任な政治家の北方經略論がある。既に大同元年、北魏の東西分裂に際し司州刺史陳慶之は魏の宗室北海王顥を擁して北方政局に武力干涉を試みたが、この事はつひに南朝の天地を動亂の渦に卷き込んだ。梁朝內治についていへば宗室は豪貴を競ひ法令に隨順せず、互に反目猜忌を事とした。刑政弛緩し貨賂橫行し安逸の氣は宮廷に滿ちてゐた。湘東王とてもかゝる一般の空氣から自由であつた譯ではない。南史は梁書より、通鑑は南史より、彼の細行の過失を列示し、その性格の弱點をあげつらふこと頻りである。しかし吾等はこゝでは只管彼の生涯の全貌を理解せんことにつとめるべく、片々たる事實を箇條的にとりあげることにより彼を嘲り、彼について嘆くべきではなからう。

雲行あらき南北の情勢を眺めつゝ、彼は自ら諸葛亮桓溫に比して述懷した。

諸葛司馬二相は誠に一國の宗師、霸王の賢佐なり。孔明巴蜀の地に起り、一州の土を蹈み、刑法を省任し、軍伍を整齊し、步卒數萬、祁山に長驅し、慨然として河洛飮馬の志あり。仲達は天下十倍の地に據り、兼行の衆に仗り、牢城に據り、精銳を擁し、擒敵の意なし。もし此の人死せずんば則ち雍梁敗れんこれを司馬に方ぶるに、理大いに優らずや（雜記下）

といひ孔明を推してゐる。また嘗つて人に謂ひて曰く

諸葛武侯・桓宣武、竝に王室を翼贊し、遐外に宣威す。これ鄙夫の慕ふ所以なり（立言上）

吾等にはやゝ異樣に感ぜられる孔明と桓溫の並稱は彼等が共に南方を據點として中原回復を圖つた點において同樣なる爲である。旨酒と淸談の中にあつても中原回復は南朝人の忘れがたい望みであつた。彼自らも曰く

我嘗つて瀚海に稜威し、幕を居延に絕たんと欲す。萬死を出でゝ顧みず、必ず威をして諸夏に振はしめん。然る後、聊城を度りて長望し、陽關に向ひて凱し入り盡忠盡力以て國家に報いん。これ吾の上願なり（立言上）

金樓子の諸篇はその執筆された年月は久しきに亘り散佚・錯誤も少くはないが、平和で屈託なかつた帝の幼少から、險しき天下の形勢に直面して次第に責任を感じてきたその壯年に至る間の彼の思想や學問上の見解の推移があとづけられないこともない。

三　金樓子の思想

元帝の著作として梁書に傳へられるもの孝德傳・忠臣傳・丹陽尹傳・注漢書・周易講疏・內典博要・文集等多數に上るが、その中には臣下に命じて纂次させたり、諸家の說を集成したものもあり、彼自身の言によれば渚宮に出牧せる時作つた玉韜十卷が最も自信があると云ふ。

金樓子は隋唐宋各志には二十卷ありとし、晁公武讀書志には十五卷といひ、その後次第に湮滅し明末に至り散亡し、現行本は永樂大典に據り遺文を集めたものである。

この書の叙事の中に箴戒を混へてゐるとは夙に注意されたが、この事は元帝がその好學によつて獲た蘊蓄を次第に政治の參考に自ら供しつゝあつたと見るべきであらう。たとへば興王篇において神話時代の帝王の事蹟に始り、近代に及び漢の太宗、後漢の世祖、魏武晉の世祖の儉節の德を述べてゐる。その堯舜の德を述ぶる際に、道德を擧げるよりも多く祥瑞に重きを置いてゐるのは亦當時の風潮である。嚳妃慶都河渚に出觀し赤龍に遇うて孕み、修己山行して流星昴を貫くを見て意感じ、神珠薏苡を呑んで胸拆けて禹を石紐に生み夜神光ありと云ふが如き、その例である。箴戒篇においても前代帝王の政治を破敗せしめたる原因に、女色や奢侈佞臣や佛敎の墮落を擧げると共に、天災地變天に對する冒瀆、迷信怪異の如き陰陽五行の變を加へる

のを忘れない。后妃・説蕃の二篇これに續き、その中には時に貴重なる史料を含んでゐるが、帝の意圖した鑑戒の目的はその該博なる知識の披瀝や祥瑞妖異への好奇心に壓倒されて、本來の道德的制約を緩くした感がある。たゞ襟を正さしめるはその制作態度である。元帝は知己裴幾原が彼に問ひ「西伯・孔子を始め著述する人は皆心に悅ばざるある時にするのが古來の例であるのに、貴方は千乘の尊に居り何の不滿もなかるべきに何故さう著述されるか」といつたのに對し

中原回復の上願達せられず、清酒彈琴、志あり遂げず、性抑揚に過ぎ、恒に權衡物に稱ふを欲するが故に、隆暑にも熱を辭ます、凝冬にも寒を憚らず、鴻烈を著はす(立言上)大意

と答へ、また「何故有識に詢り共に著作せず、區々として自ら勤むるか」との問ひに答へ

予の術業、あに賓客の能く闚ふ所ならんや。これ蓋し莚を以て鐘を撞き、盞を以て海を測るなり。予かつて淮南不韋の書、賓遊の製する所たりと謂ふに切齒し、毎に著述の間に至れば賓客をしてこれを闚はしめず(立言上)

と答へてゐる。單に好學の名を誇示するに非ず、他意あつて學を表面的に保護奬勵するに非ず、元帝こそは眞に好學人であり當時の最高の知識であつたといふべきである。

元帝は古今の群書を博覽し、多年勉學を廢せず思ふよりも讀む事が多かつた。故にその思想は六朝時代の他の思想家によく見るごとく、諸學說の折衷調和を目的としてゐる。

世に干戈を習ふ者、俎豆を賤み、儒を修むる者、武功を忽せにするあり。范寧は王弼を以て桀紂に比し謝混は簡文を以て赧獻に方ぶ。李長に顯武の論あり文莊に廢莊の說あり。余おもへらく然らず。余は孫吳を以て營壘となし、周孔を以て冠帶となし、老莊を以て歡宴となし、權實を以て稻糧となし、卜筮を以て神明となし、政治を以て手足となす。一園の木千鈞を持し、五寸の楗開闔を制す。これを綜ぶる者は明なり(立言上)

いかにも當時のあらゆる知識の寶庫を開くべき閑暇と便宜を有する好學帝王の文化享受の姿がこの語に寫し出されてゐる。

諸派の學問を兼ね學べば自らその長短を知りうる。

諸子は戰國に興り文集は二漢に盛んなり。家家に製あり、人人に集あり。その美なる者は以て情志を叙べ風俗を敎うするに足り、その弊なる者は祇に以て簡牘を煩はし後生を疲らしむ。往者既に積み來者未だ已まず。足を翹げ學に志し白首徧ねからず。或は昔の重んずる所にして今反つて輕んぜられ、今の重んずる所にして古の賤む所なり。あゝ我が後生博達の士、能く異同を品藻し蕪穢を刪整し、卷に瑕玷なく覽に遺功なからしめば學といふべし(立言上)

流派を兼綜すると共にその長短に隨ひそれを整理し系統づけるのが學の意義である。

吾少にして兵書を讀む。三十餘年搜纂數千、止一帙となす。菁華領袁備さにその中にあり(立言上)

といふが如く、帝の好學も單に好奇心に終つたのではなかつた。識見の重視は無意味な史論を斥けてゐる。例へば孔文擧の言に漢高祖と周武王とを比べ、前者に祥瑞多きを以て優れりとし、殷拱遠が、魏武の師は本親擧に由り漢祖の起るは亂兵による故に魏武を優れりとし、蔣子通が漢祖の天下を取るは山に登るが如く、光武の天下を取るは丸を走らすが如しと言つた諸例を引き、その議論の淺薄看るに足らずと貶し

凡そかくの如き例、書あるも書なきに如かず。これを煨燼に委すとも事において宜となす(立言上)

といふ。漢祖と光武との優劣論は當時屢々闘はされたもので、元帝は曹植・諸葛亮・仲長統・東晉簡文帝の前說を列し、最後に「世祖極めて優れり」との自說を掲げてゐる。(立言下)

諸家の學說の研究理解、その取捨と系統づけを辿つてゆき遂に學ぶ者の識見の厚薄が顧みられる時、おのづから實踐の領域に入り、いかなる規範に隨ひ學び且つ行ふべきかを反省する。その規範に叶つた人は卽ち君子といふべきである。

君子は窮に邑邑たるなく賤に勿勿たるなし。これを譽むとも勸を加へず、これを非るも沮を加へず、外內の分を定め、榮辱の心を夷かにす、不易の方を立ててここに恒あり(立言上)

君子は安安を以て鴆毒となし富貴を不幸となす。故に情に溺るる者は月滿の虧を忘れ、道に在る者は日損の貴たるを知る。……玉琢かざれば器を成さず、

人學ばざれば道を知らず。もし天縱ありと雖も曾て學術なくんば猶し伯牙空しく彈じ七絃なくとも則ち悲まず、王良轡を失ひ駟馬に處すとも則ち疾からざるが若し。晉の平公師曠に問ひて曰く、吾年已に老いたり。學將た晩きかと。對へて曰く、少くして學を好む者は日の盛陽なるが如し。老いて學を好む者は燭を乘りて夜行するが如しと。この言を追味し師となすべし(立言上)

先づ君子は貴賤窮達褒貶貧富に對して恒心を把持すべきこと、絕えず學ぶべきこと、等を說きついでその誡めとしては

君子は當に二輕を去り四重を取るべし。言重ければ則ち法あり。行重ければ則ち德あり。貌重ければ則ち威あり。好重ければ則ち觀あり。言輕ければ罪を招き、貌輕ければ則ち辱を招く(立言上)

君子三患あり。未だこれを聞かずんば聞くを得ざるを患ふ。既にこれを聞けば學ぶ能はざるを患ふ。既にこれを學べば行ふ能はざるを患ふ(立言上)

君子に四耻あり。その位ありてその言なきは君子これを恥づ。その言ありてその行なきは君子これを耻づ。既にこれを得、又これを失ふ。君子これを耻づ。地餘りありて民足らざるは君子これを耻づ(立言上)

君子は狂夫の言を取り、萬得の一失を補ふ(立言上)

これら何れも純然たる儒家の口吻である。かつ政治に臨む者の心得として考へられるものである。用心の必要を論じて曰く

書に稱す、立功立事、以て永年君子の用心たるべしと。恒に須く濟物を以て本となすべし。それに加ふるに立功を以てしこれに重ぬるに修德を以てすればあに美ならずや(立言下)

夫れ目秋毫を察して華嶽を見ず、耳宮徵を聽き雷霆を聞かず。君子用心必ず須く普かるべし(立言下)

かゝる用心についての言說は彼見身帝王たるべき地位におかれた結果の自戒である。

哲人君子淫を戒め沖を思ふものは何ぞや。政は以て睹ざる所を戒懼し、聞かざる所を恐畏す。況んやそれこれより甚しき者をや。それ深宮の中より生れ、婦人の手に長ず。憂懼の加らざる所、寵辱の未だ至らざる所、ここに齠齔より便ち邦君となる(立言上)

彼に在つては君子たるべき資格は人主たるべき資格

に應ずる。曰く

主に三惡あり、文德を修めずして武功を尙ひ、敎化を明かにせずして任刑を枉ぐ。是一惡なり、妃妾百を以て數へ、黔首鰥寡多し。是二惡なり。男耕耨せず、女紡績せず、梯軸既に空しく田疇蕪穢。これ三惡なり。主に三殆あり、德に倍きて色を好み、諂諛を親しみ忠直を遠け、嬖子衆多、嫡嗣立つなし。是一殆なり。嚴刑峻法、是二治なり、犬馬黍を啖ひ、民糟糠を厭かず、是三殆なり（雜記下）

彼は性仁弱、罪囚の刑せられるを見るに忍びなかつたがかつて法三章に擬し「叛者は死、附かざる者は死、違令の者は辠に抵す」といつた。（立言上）

君子たるの道を家に移し國に及ぼすといふ思想は全く儒家に從つてゐるが、所謂「諸家の說は濟世各々方あり」との考へで、政治には「一明一晦を最善となす」と云へる如き、また「人君は當に江海を以て腹となし林叢を心となし、天下の民をして測る能はざらしむべし」とある如き法家的乃至道家的口吻をしば〳〵洩らしてゐるのが注意される。（立言下）

宇內に並びなき地位と天稟の才藻を兼ね有したる自負と氣概に任せて

周公沒して五百年、孔子あり。孔子歿して五百年、太史公あり。五百年の運、余何ぞ敢て讓らん

と叫び

學術あらずんば何を以てか器を成さん。川溜石を決す勉めざるべけんや。馳光留らず、逝川倏忽たり。尺璧寶に非ず、寸陰惜むべし。文武の二途竝に儔匹を得。……莊周往きぬ、嗣宗長逝す。吾知る、宇宙の內更に人ある哉（立言上）

と學問に對する熱情を披瀝し、多少衒つた所なしとせず、また後世儒者をして不遜なりと評せしめた五百年の運の言も、六朝文化の最高峰に立ち四方の眺望を擅々にしてゐた彼の地位を考慮に入れればうなづけぬことはない。

生也涯あり、智也涯なし。有涯の生を以て無涯の智を逐ふ。余將に養性養神、麟を金樓の制に獲んとすといふ時、吾等は謙虛なる文化の愛好者として永遠の價値に向つてゐる帝の姿を見るのである。

四　太清の亂

太淸元年、彼は廬陵威王續に代つて再び荊州刺史と

なり、荊雍湘司郢寧梁南北秦九州諸軍事を都督した。荊州は元來南朝の國防上の要地であり、この地の方鎭となるのはたとへ順を逐うた陞進とはいへ重職である。殊に先に述べた如く北方の脅威が強く掩ひ懸つてゐる際、この赴任は彼の今後の運命を決したものである。河朔六鎭の鮮卑軍人の間に起つた叛亂の渦紋は梁にまで波及してきた。いふ迄もなく侯景が東魏の高洋の許を去つて武帝に投じたことである。謝擧・周弘正ら先見明識ある諸臣の諫に從はず、權臣朱异の大膽な勸告に惑はされ、武帝が侯景に大將軍河南王大行臺の榮職を與へたのはこの年二月である。これまで平和を保つてゐた東魏との間に再び戰端が開かれ侯景ら梁の北伐軍は功なく反つて彼は壽陽に逃れ據り、梁室に對して軍費を强要するに至つた。それが一旦拒絶されて進退谷つた侯景は忽ちその隱してゐた野心を露はし、朱异を誅するを名とし擧兵し、梁の宗室の臨賀王正德を擁して建康城を圍んだ。梁武は寬縱の治を行ふことによつて恩顧を施した降將にも、骨肉の親ある一部宗室からも反かれた。武帝の鍾愛斜めならざりし湘東王はこゝに宗室の盟主として、直ちに部內を戒嚴し、督する所の湘州刺史河東王譽・雍州刺史岳陽王詧・江州刺史當陽王大心・郢州刺史南平王恪らに檄を移し兵を發し建康入援を聲明し、まづ世子方等及び竟陵太守王僧辯をして各々一萬の兵を將ゐ東下せしめ、ついで次子方緒を留め親ら三萬の軍を以てこれに續き、翌三年二月武城に駐り形勢を伺つた。

貴族政治の時代は去つて武力解決の時機となつた。貴族的教養豐かなる湘東王は今や軍陣の主帥として、地方の新興勢力たる武人を手足としなければならなかつた。王僧辯及びやゝおくれて彼の幕下を歸した陳霸先は共に蠻勇なる荊楚の軍隊をひきゐた猛將で、これら軍隊が荊州用武の地に據り彼を戴いてしばしの間梁室を維持することになる。しかるに彼をはじめ來援せる梁の宗室諸王は相互に反目嫉視にあけくれ、北朝の兵力を恃みとする者など來てきて、北朝の南朝に對する影響力は急に增大した。諸王は侯景の軍隊を恐れて容易に進擊を開始しなかつた。この不始末の責任を湘東王は逃るべきではなからう。一方建康の守將は概して怯懦で士卒の無能無規律なる樣も來援軍に劣らない。包圍されること日に久しく士民困廢し三月城陷り、

侯景は武帝及太子綱と會見し詔を矯り來援軍の解散を命じた。諸王は各自勝手に任地に引き上げたので、湘東王は四月空しく江陵に歸り、世子方等からの形勢急迫の報により城の周圍七十里に柵を築き塹を掘つた。從來南朝で屢々建康政府に對抗する軍閥の根據地となつた荊州は建康が北方軍閥に左右される樣になつた今では南朝殘存勢力の中心地となつた。

悲運は次々と梁室一族を襲つた。食糧難の建康城で事々に侯景に制せられ憤懣やるかたなかつた武帝は三年五月、悲痛な最期を遂げ、太子綱は嗚咽の聲を洩らさず、實權なき帝位をつぎ、民戶凋零せる三吳一帶を號令した。これよりさき、太子舍人蕭韶がもたらした武帝の密詔により、假黃鉞大都督中外諸軍事司徒承制となつた湘東王は、當然簡文帝の在位を認めず、太清の年號を改めず、諸王に兵を徵して復讎の師を起さんとした。しかるに河東王譽は彼の命を奉ぜず兵員を提供するを肯んぜず、元帝の派した世子方等の軍と戰ひ彼を敗死せしめた。四川では彼の弟武陵王紀が既に自立し襄陽の岳陽王詧は西魏の附庸となり、彼を攻めたが、元帝は勇將王僧辯を再び登庸し、南支の銳卒を率ゐる始興太守陳霸先と共にこれに當らせた。一方翌年二月西魏と國交を修し、五月長沙による河東王を擒殺し、始めて武帝の喪を發し檀を刻みその像を造り百福殿に安置しこれに勤事し孝情を示した。かくて父帝の像に復讎を誓ひ、郢州の邵陵王綸らと共に義兵をあげ北齊とも修好し王　陳二將を始め徐文盛・胡僧祐・陸法和の諸將をして武昌・巴陵に侯景の軍を敗つた。侯景はこの時既に簡文帝を廢し豫章王棟を奉じてゐたが、形勢不利と見て簡文帝以下の宗室を殺害し自ら帝位に卽いた。元帝はこれまで宗室の南平王恪はじめ群臣の再々の勸進をうけたが巨寇未だ亡びざるを以て帝を稱するを肩としなかつたらしい。白茅灣頭血を歃つて盟ひあつた王僧辯・陳霸先二將は建康を陷れ、侯景を斬つた。かくて承聖元年十一月、湘東王は愈々江陵で帝位に卽き、長江沿岸の狹小な地域を支配した。民戶籍に著く者僅か三萬、帝はこの頃しば〳〵勸農詔を下してゐる。建康では北齊の壓力が加り、王僧辯らの主力部隊は侯景亡ぶと雖も俄かにこゝを引上げるわけには行かなかつた。

こんな次第で元帝はその股肱の將軍から離れて空虛

なる江陵城を、御し難き荊楚の軍勢を率ゐて守らざるを得なかつた。元帝にとつて畏るべく怨むべきはかつて彼が襄陽の短狐と諷刺した岳陽王が強敵西魏の兵力を楯として彼の居城を覘つてゐることであつた。西魏は南朝勢力の四分五裂の樣に乘じ既に江北の土地を奪つてゐたが、更に尉遲迥をして武陵王を破つて蜀を占領せしめた。梁益の占據を待つて魏將于謹の率る精騎は漢水を濟り江陵に殺到した。承聖三年十一月、主將胡僧祐以下、江陵城の將士は防備を固め、一方四方の援軍を急募した。元帝自ら馬に乘り城を巡り、警備狀況を觀察し夜に至り寺院、民家に泊ることも屢々であつた。この頃まで猶帝は龍光殿に老子を講じ、戎服の將士をして聽講させ學藝に對する去りがたい愛着の情を示してゐた。正に彼の抱負たる「文武二途並びに儔匹を得ん」と欲したものゝ如くである。馬上に詩を賦し、帛を裂いて王僧辯の來援を促したが、時非にして梁軍の諸營の死傷者夥しく、かつ城中に失火あり、多數の婦人が軍法の責任を問はれて刑せられた。かゝる悲慘事につゞき甲寅の日、勇將胡僧祐流矢に中り戰死すると共に內通者は敵軍を西門に導き入れ、大勢こゝに決した。しかも最期の時まで城中の士氣振ひ、南支出身の勇士は善く北狄の精騎と死鬪したのであつた。日暮れて兵散じ、帝は東閣竹殿に入り、舍人高善寶をして古今圖書十四萬卷を焚き自らその火中に躍り入らんとした。宮人に留められ寶劍を以て柱を斫ると双こぼれた。歎じて曰く

文武の道今夜盡きぬ

城を出で遁走する樣に勸めた者もあつたが帝は馬術巧みならずその決心を鈍らせ、遂に岳陽王・于謹の前に屈辱を忍んで降參せねばならなかつた。何故書を焚きしやと問はれ

讀書萬卷、猶今日あり、故にこれを焚けり

と答へた。悲劇的な帝の生涯はこゝに終る。辛未の日、帝は魏人に殺害され津陽門外に葬られた。陳霸先が擁立した彼の皇子方智はまもなく霸先に位を禪つたが、陳の勢力ももはやそれ以前の南朝諸朝に及ばなかつた。北朝の君權は南朝貴族制を顚覆し、江南佳麗の文化は北方の力に包まれてのみ存續した。文武全材を兼有せんとして成らざりし元帝の一生はかゝる時代の流れの縮圖として理解せられるであらう。（をはり）